

## 日本人英語学習者は主語をどうとらえているか ー量的・質的研究\*

梅原大輔  
甲南女子大学

富永英夫  
武庫川女子大学

### ABSTRACT

Some Japanese learners of English produce English sentences like *\*This river cannot swim*, which is apparently influenced by the topic-comment construction characteristic to Japanese. In order to attain a certain level of proficiency, learners must learn to use the subject-predicate construction basic to a subject-prominent language like English. This study reports the results of a research consisting of grammatical judgment and explanation/correction tasks, which was conducted to 188 students from three universities in Japan. In the task, twenty sentences, both grammatical and ungrammatical, were used to test the students' awareness of subject-topic distinctions. The data were processed both quantitatively and qualitatively. We found out that groups from each of the three universities showed striking differences with regard to the students' grammatical awareness and the stability of its application, and we have concluded that they are supposed to represent three groups: 1) those who have definite awareness on syntactic subject and semantic agency/animacy, 2) those who are vaguely aware of it but are not consistent in its application, and 3) those who are largely influenced by translation of Japanese and lack awareness of grammatical subjecthood.

**Keywords:** 中間言語文法、文法意識、EFL、主題優位性、主語

#### 1. はじめに

日本人が書いたり話したりする英語に、次のような文を見聞きすることがある。

- (1) This river cannot swim.
- (2) This hotel cannot use the Internet.

また、次の例も実際に大学生が書いた英語から抜粋したものである。

- (3) School uniform don't need to choose every morning.

(原文のママ。「制服は毎朝選ばなくてもいい」の意味)

いずれの文も、述語に対して不適切な名詞句を誤って主語にしているという点で共通した特徴を持っている。

こういった文には日本語の構造が影響していると考えられる。特に *cannot* や *must* といったモダリティを含むと、「この川は泳げません」「このホテルはインターネットが使いません」といった日本語の訳が自然なものに聞こえてしまう。実際にこのような英文を作る学習者は多くないとしても、潜在的にこれらに違和感を感じない学習者が一定数いるのではないかと経験的に予想することができる。

本研究は、3つの大学の日本人学生 188 名を対象に行った文法性判断テストと判断理由についての記述による調査、追加的な面接の結果をもとに、学習者が英語と日本語の主語の違いをどのように認識しているのかを調べたものである。日本語と英語の主語の違いについて英文法や国文法で明示的に教えられることはないものの、英語の主語性についての意識は学習者間でかなり明確な差があることがわかった。

## 2. 研究の目的：主語優位型言語を習得するという事

Li and Thompson (1976)以来、言語類型論では、英語のような主語優位型言語(subject-prominent languages)と、中国語のような主題優位型言語(topic-prominent languages)の違いがよく知られることとなった。主語優位型言語が主語-述語関係を文の基本構造としているのに対し、主題優位型言語は主題-陳述関係を文の基本構造としている。日本語は主語をマークする「が」と主題をマークする「は」の両方が存在するため、主語優位型と主題優位型の両方の性質を持つと言われる。しかし少なくとも日本語に主題陳述タイプの構文が存在し、日常的に広く使用されていることは明らかである。

柴谷 (1985)や Comrie (1989)が言うように、主語という概念はプロトタイプ性を持っていると考えるのが妥当だろう。すなわち主語とは、文法上の主格、意味上の動作主、談話上の主題などが複合した概念であり、これらの特徴を多く持つ語句ほど典型的な主語と認識される。英語ではこのうち特に主格が主語を規定する中心的な要素であり、文法的な主語の存在が義務的である。また意味役割による主語化傾向の階層性によって主語名詞句が選択されるため、動作主があれば必ず能動文の主語となる。その一方で英語の主語にとって、主題としての役割はどちらかと言うと小さい。これに対して日本語では、主題陳述構造が一般的であることに加えて、主格の働きが英語に比べて弱い。このため主格名詞句はしばしば省略され、結果として「この川は泳げない」のような文が頻繁に使われることになる。日本語と英語には主語をめぐるかなり根本的な文構造の違いが存在するのである。

外国語を学ぶときにこのような構造の違いは障壁となるのだろうか。Rutherford (1987)は、初期の中間言語は学習者の L1 と関わりなく主題陳述文の特徴を持つと述べている。また、L1 の類型論的特徴が L2 学習の際に転移するかどうか、という点について、80年代から90年代にかけていくつかの研究があった。Fuller and Gundel (1987)は、初期の中間言語では主題優位型の傾向があると指摘したが、Jin (1994)は主語優位型言語を母語に持つ学習者が主題優位型言語を学ぶ際には、やはり L1 の構造が転移すると主張した。Sasaki (1990)は日本人の高校生を対象にした調査を行い、存在を表す文を作る時に、英語力が低い学習者に(4)のような主題陳述型の誤った文が相対的に多く見られることを示した。

(4) Taro's school is twenty-five students.

また、Yuan (1995)は逆に主語優位型の言語を母語に持つ英語話者が中国語を学習する時に、主題構文はかなり後の段階になって習得されると指摘している。これらの研究をふまえるなら、日本人英語学習者の英語に、日本語的な主題陳述型の構造が何らかの形で影響を与える可能性は高いと言えるだろう。

日本人が英語を習得する過程においては、どこかで主題陳述的な発想の文を封印して、主語述語型の文構造を身につける必要がある。しかし日本語と英語のこのような違いは、少なくとも中学や高校の英語教科書では明示的に取り上げられていない。例えば中学校の教科書では、「「～は」の部分は主語という」(New Horizon I, 2004年版、東京書籍)とか、「文の最初の「～は(が)」にあたる部分を主語といいます」(New Crown I, 2010年版、三省堂)といったごく簡単な記述しかなく、高校の教科書でも日本語と英語の主述構造の違いを改めて説明することは行われていない。

また国語教育の場でも日本語の特徴を意識して教えることは行われておらず、主題という用語も国文法では使われていない。これらのことから、日本人の英語学習者は一般に、「～が」によって示される主語の概念と「～は」によって示される主題の概念の違いを、学校教育の中で明示的に学ぶ機会を持っていないと考えられる。

そこで、本研究では、日本人の英語学習者は日本語的な主題陳述文を英語的な主語述語文と区別しているのか、またもしそのような区別が可能だとすれば、どのような形で理解しているのか、という点を明らかにすることを目的に調査を行った。

### 3. 方法

#### 3.1 調査参加者

本研究の参加者は、3つの大学の日本人大学生 188名である。いずれも筆者たちが調査時に大学の授業で担当していた学生で、学年は1、2年生である。それぞれの大学のグループを以下のようにA、B、Cと名付け、言及していく。

Aグループ(国立大学文系/理系) : 62名

Bグループ(公立大学文系) : 65名

Cグループ(私立大学文系) : 61名

調査は、授業の一部を利用する形で実施した。

#### 3.2 調査方法

20の英文(正しい文11と誤った文9)を提示し、その文法性を判断してもらう文法性判断テスト(Grammatical Judgment Test、以下GJTと略す)を行った。文法性の判断にあたっては、「間違っている」から「正しい」まで6段階のリカート・スケールにマークしてもらう形を取った(図1)。「間違った英文であると自信があるときには1を、正しい英文であると自信があるときには6を選んでください。文法性の判断に確信がないときに

は、2 から 5 の中から 1 つ選んでください」という指示を書面で与えた。被験者が行った判断は文法性そのものの判断ではなく、文法性判断への確信の度合いを数値にしたものである。



図 1

さらに、間違っていると考える場合（1 から 3 にマークする場合）には、間違っていると考える理由を自由記述するか、正しい文に訂正するかしてもらった（説明・訂正課題）。また正しいと考える場合（4 から 6 にマークする場合）には、どういう意味で判断しているのかを確認するために日本語訳を書いてもらった。これはまた、正しいと判断した場合にも一定量の作業をさせることで、安易に「正しい」という側の選択をしないように配慮したためでもある。回答時間として少なくとも 30 分を確保した。

ここで中間言語文法の調査として GJT を用いることについて説明を加えておきたい。学習者の明示的な言語知識を問うことは、一般に外国語習得研究の方法として有効ではないと考えられている。ネイティブスピーカーが文の文法性を判断する直観を持っているとしても、それを明示的に説明する語彙や概念を持っているわけではなく、言語知識は暗示的なものだと評価されているためである。従って我々の目的は、学習者が正しい明示的説明をするかということではなく、第一には正しい感覚を持っているか、第二に、もし持っているとすればそれをどのような形で言語化する可能性があるか、あるいは言語化をせずに正しい形を提示できるか、という点にある。

Ellis and Barkhuizen (2005)は、GJT は時間制限を加えることで無意識の文法能力を判定できるが、時間の制限がなければ明示的知識が介入してくるため言語能力の判定テストとしては適切なものにはならないと指摘している。しかし、本調査では特に判断の時間を限らず、明示的知識も含めて判断に加えることができるようにした。Ellis らは、母語話者と同じ無意識的な言語能力を GJT が測定できるかどうかを問題にしているが、日本のような外国語環境での英語学習では、明示的な知識も含めて学習者の持つ言語能力と捉えるべきだと考えるからである。

この調査で使用した 20 の文は、いずれも主語述語関係の一致に関する問題を含んだ文であり、あらかじめ 1 つの大学の別の学生グループに対して行った予備調査を通して、誤文であっても文意が伝わる例を選んだ。単語の意味が分からないことで判断に影響するのを避けるために、なるべく簡単な語を使用し、一部の語句については調査文の中に日本語の意味を書き添えた（Appendix 1 を参照のこと）。

主題を主語位置にとる誤った文として典型的と考えたのは、次の Q7 と Q17 の例である。これらは場所の名詞句を主語位置に置いており、主述関係が乱れている例である。また、

## 日本人英語学習者は主語をどうとらえているか—量的・質的研究

場所以外の名詞句を主語位置に置いた同様の例として、Q9 の文を加えた。これらの誤った文をまとめて本稿では「主題陳述型誤文」と呼ぶことにする。以下、誤文にはアスタリスクをつけて示している。

Q7. \*This hotel cannot use the Internet in the room.

Q9. \*Summer in Japan can enjoy fireworks festivals in many places.

Q17. \*Unlike university, most high schools must wear a uniform.

主題陳述型誤文の一種として、場所を表す前置詞句を文頭に置いたのが Q20 である。主語になれるのは名詞句だけであるが、日本語の主題には名詞句の他に副詞的な句もなることができる。「長野では美しい山の景色を見ることができる」という文は「長野で」を主題とする主題陳述型構文である。

Q20. \*In Nagano can see a beautiful view of mountains.

動作主以外の主語をとる正しい文として使ったのは次のような例である。これらの文はいずれも慣用的な表現であるため、動作主主語への意識が強ければ間違った文と判断してしまうと予測できる。

Q1. There are a lot of things that money can't buy.

Q3. This stadium can sit more than 50,000 people.

Q6. Last year saw some important development in computer technology.

Q16. Most newspapers wrote about the train accident yesterday.

また道具格の名詞を主語にしたのが次の 2 例である。上の 4 例に比べると一般的な文ではあるが、やはり動作主主語という視点からは間違っていると判断する可能性がある。

Q10. The hammer broke the window into pieces.

Q19. This key can't open the door. It is a wrong key.

ネイティブスピーカーでも判断が分かれる微妙な例として、*need* を主動詞にした次の 2 例を加えた。複数のネイティブスピーカーの判断を踏まえて、Q2 を非文法的な文、Q11 を文法的な文として扱った。この 2 つの文法性を適切に説明することは、通常の文法ではできないが、あえて微妙な例を加えることで、直感的ではあってもネイティブスピーカーに近い判断ができる学習者を拾い出すことができるかもしれないと考えた。

Q2. \*This train doesn't need an express ticket. It is a rapid service.

Q11. This restaurant always needs a reservation, because it is very popular.

梅原 大輔 / 富永 英夫

文法的に問題のない文として他に、次の 3 例を加えた。このうち Q14 と Q15 は感覚動詞の主語にモノをとる例であり、慣用的な性格が強いかもしれない。

Q12. You can enter the public swimming pool with a small admission fee.

Q14. This blue jacket looks good on you.

Q15. It feels nice to be with my good friends.

受身に関する感覚を確かめるために、次の 2 例を加えた。

Q5. \*This river can be drunk water because it is very clean.

Q18. Everybody in the class is expected to give a short speech.

さらに主語述語の不一致の例として次の 3 例のような疑似同定文も含めたが、この問題について本研究では詳しい議論は行わない。

Q4. \*This is a nice café and its coffee is very good taste.

Q8. \*My father's job is a teacher. He is proud of teaching.

Q13. I have a 10-year-old younger brother. \*His character is very shy.

## 4. 結果

### 4.1 全体的な結果

調査の結果を集計し、20 問すべての文で 1~3 が正しい文法的判断をした側になるように点数を補正した。つまり、もともとリカート・スケール上で 1~3 を「間違っている文」と判断した場合にマークさせたため、「正しい文」についてはスケールを反転させた。

全体的な結果を見るため 20 文すべてについて正答率順に一覧にしたものが表 1 である。ここでは 1~3 の回答を正答、4~6 の回答を誤答とくくり、正答率を算出している。また平均値欄に示したのは、補正後のリカート・スケール上の平均値である。数字が小さいほど、確信をもって正しく判断した被験者が多かったことを示している。

表 1 正答率順一覧

## 日本人英語学習者は主語をどうとらえているか—量的・質的研究

問題文	正誤	項目	正答数 (人)	誤答数 (人)	正答率 (%)	平均値
Q20. In Nagano can see a beautiful view of the mountains.	誤	主題陳述型文	153	34	81.8	2.18
Q9. Summer in Japan can enjoy fireworks festivals in many places.	誤	主題陳述型文	142	46	75.5	2.47
Q5. This river can be drunk water.	誤	受動文	141	45	75.8	2.58
Q18. Everyone in this class is expected to give a short speech.	正	受動文	133	52	71.9	2.72
Q17. Unlike universities, most high schools must wear a uniform.	誤	主題陳述型文	131	55	70.4	2.74
Q14. This blue jacket looks good on you.	正	無生物主語感覚文	129	57	69.4	2.77
Q11. This restaurant always needs a reservation.	正	無生物主語文	127	58	68.6	2.89
Q7. This hotel cannot use the Internet in the room.	誤	主題陳述型文	115	73	61.2	2.96
Q12. You can enter the public swimming pool with a small admission fee.	正	有生主語文	113	75	60.1	3.01
Q19. This key can't open the door.	正	道具主語文	114	73	61.2	3.23
Q15. It feels nice to be with my good friends.	正	無生物主語感覚文	84	101	45.4	3.59
Q10. The hammer broke the window into pieces.	正	道具主語文	85	101	45.7	3.62
Q2. This train doesn't need an express ticket.	誤	無生物主語文	79	108	42.2	3.8
Q16. Most newspapers wrote about the train accident yesterday.	正	慣用的無生物主語文	73	115	38.8	3.82
Q4. Its coffee is very good taste.	誤	コピュラ文	72	116	38.3	4.01
Q13. His character is very shy.	誤	コピュラ文	74	113	39.6	4.05
Q3. This stadium can sit more than 50,000 people.	正	慣用的無生物主語文	70	118	37.2	4.12
Q8. My father's job is a teacher.	誤	コピュラ文	67	121	35.6	4.16
Q6. Last year saw some important development in computer technology.	正	慣用的無生物主語文	46	140	24.7	4.38
Q1. There are many things that money can't buy.	正	慣用的無生物主語文	42	144	22.6	4.69

全体的な集計の他に、グループ別に 1~6 のそれぞれの判定を選択した人の度数とその割合を出した。また 3つのグループ間の違いを調べるために、1-2、3-4、5-6 の 3つの回答に分けてカイ 2乗検定を行った。

次に、誤文と判断した場合の説明・訂正課題については、以下のように評価し、点数化した。第一に、明確な明示的知識を示して説明したり、英文を正しい形に訂正していたりする回答を 2点と評価した。逆に、誤文と判断するものの、説明のポイントがずれている回答を 0点と評価した。また、説明が言葉足らずで、理解の度合いが確実には判断できない回答については、著者 2人で相談の上、1点と評価した。また説明・訂正欄に記述がない回答については、単に面倒で記述していないのか、誤文の判断を言語化できなかったのかがわからないため、説明・訂正課題の集計から除外した。

以上の結果として、英語の主述関係の認識について、3つのグループの間には顕著な違いが見られた。この違いは、英語の主述関係を理解し習得している学習者の割合が違うことを反映していると言える。今回の調査にあたっては、個々の被験者の英語力を測定することはしなかったため、調査によって得られた結果が被験者の英語力に影響されるものかどうかは主張できない。しかし、明らかに違うタイプの反応をする被験者を区別することができ、この違いが英語の習熟度を反映している可能性は高いと思われる。

#### 4.2 問題ごとの検討

以下では、いくつかの文を取り上げてグループごとの特徴を検討していく。最も典型的な主題陳述型誤文と想定した Q7 の文については、A グループの被験者の 93.5%が誤っていると正しい判断をしたのに対して、C グループの被験者の約 75%が正しい文だと誤って

判断した。Bグループでも約35%の学生がこの文を正しい文と誤った判断をしている。図2でヒストグラムと度数による割合を示した。

### Q7 This hotel cannot use the Internet in the room.

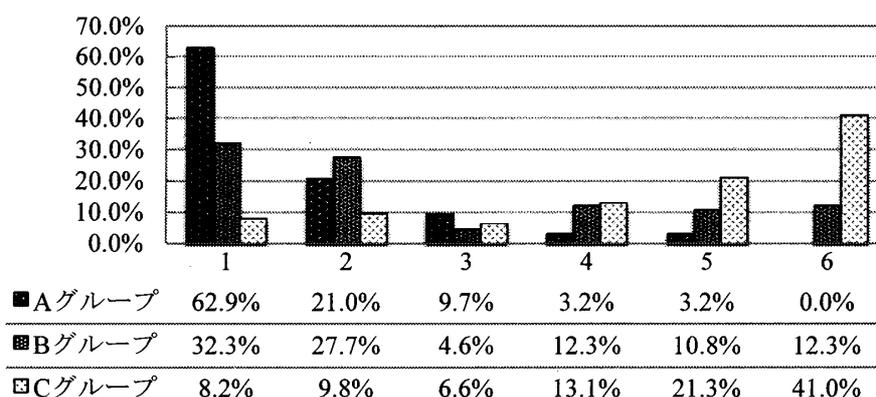


図2

Q7についてカイ2乗検定を行ったところ、 $X^2(4)=62.457$ 、 $p<.01$ 、CramerのVは.409であった。実測値と残差分析の結果は表2のようになり、Aグループで正解判定をした被験者とCグループで不正解の判定をした被験者が有意に多く、逆にAグループで不正解判定をした被験者とCグループで正解判定をした被験者が有意に少なかった。

表2 Q7に対する実測値と残差分析

	1-2	3-4	5-6
Aグループ	52▲	8	2▽
Bグループ	39	11	15
Cグループ	12▽	9	38▲

(▲有意に多い、▽有意に少ない、 $p<.05$ )

ただし、この文を誤っていると判断した被験者も、判断の根拠が正しいとは限らない。特にCグループの場合、この文を間違いと判断した被験者はあわせて10名いたが、そのうち主語述語関係に問題があると明確に指摘したのは3名だけだった。他の回答者は、「this hotelをin this hotelとすべき(C05)<sup>1</sup>」だとか、「動詞をcannot be usedにすべき(C39)」といった誤った説明や、はっきりしない指摘をしていた。

時間の句を主語にしたQ9の文では、正しいとする判断は全体に少なくなるものの、グ

ループによる違いは先ほどと同じ傾向である(図3)。カイ2乗検定の結果もQ7の場合とほぼ同じで、 $X^2(4)=35.263$ 、 $p<.01$ 、CramerのVは.306であった。

### Q9 Summer in Japan can enjoy fireworks festivals in many places.

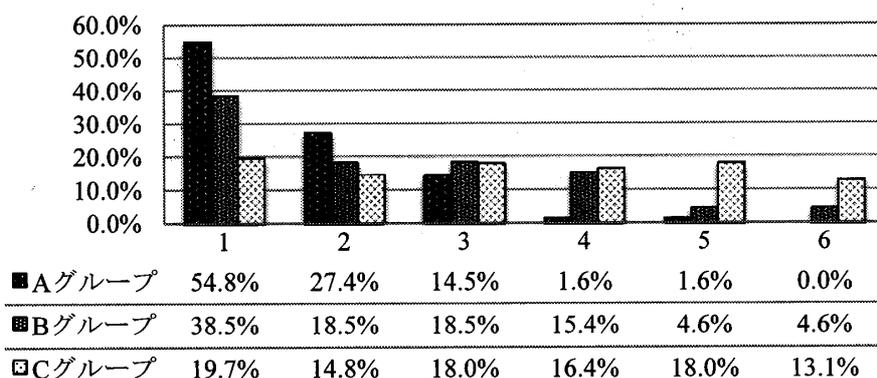


図3

Cグループでこの文を誤っていると判断したのは全体の54.1%にあたる33名で、Q7に比べると正しい判断が多くなっている。しかし、このうち明確に文の主語がおかしいと指摘した回答者は9名にとどまった。その他の回答では、「summer in Japanは最後につけるべきである(C26, C59)」「in Japanの位置は文末(C24, C56, C66)」「時、場所が文頭はおかしい(C51)」といったように、時や場所の副詞句を文末に置く語順を念頭においたものが8件もあった。英語そのものに対する直感的判断というよりは、初級段階で教えられた明示的な文法規則を機械的に適用して文を判断している様子を見て取ることができる。ちなみにこのような指摘はAグループ、Bグループでは一件も見られなかった。

場所の前置詞句を主語位置においたQ20の文(In Nagano can see a beautiful view of mountains.)については、「主語がない」と正しく判断できる被験者の割合がかなり高く、Aグループではこの文を正しいとする被験者は0名であった。Bグループでは、この文を間違っていると判断したのは81.5%にあたる53名いたが、そのうちの8名(15%)の被験者は、「Inはいらない」という指摘をしていた(図4)。

## Q20 In Nagano can see a beautiful view of mountains.

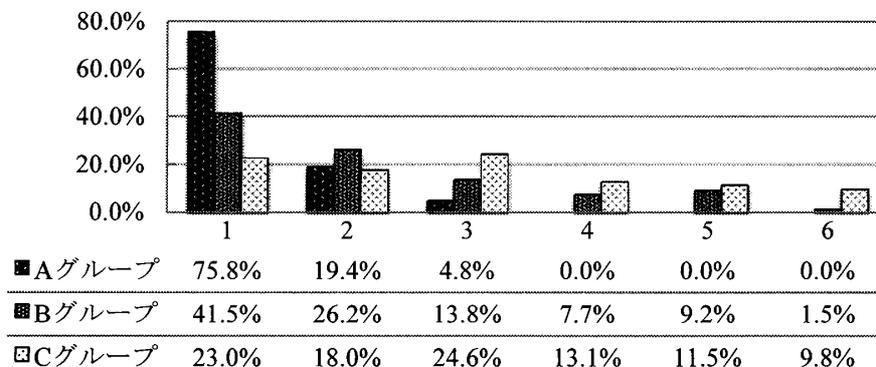


図 4

場所の名詞句に比べて、時の名詞句が主語位置にある場合に、誤っていると判断する被験者が相対的に多くいた。Cグループを例にとると、時の名詞句を主語位置に置く Q9 (Summer in Japan can enjoy fireworks festivals in many places.)や場所の前置詞句を主語位置に置く Q20 (In Nagano can see a beautiful view of mountains.)に対しては、主語がおかしい、というコメントの他に、場所の *In Nagano* や時の表現を文の最後に置くべきだというコメントが複数見られた。一方、Q7 (This hotel cannot use the Internet in the room.)の *This hotel* や Q17 (Unlike university, most high schools must wear a uniform.)の *most high schools* のような場所の名詞句の場合、これらを文の最後に置かなければならない、と指摘した被験者はいなかった。主語述語関係についての意識が明確でない学習者であっても、前置詞句や時の表現が文頭にあると、それは主語ではなく副詞的要素だ、という判断を下しやすいと推察できる。

図 2 から図 4 で取り上げた 3 つの文(Q7、Q9、Q20)に Q17 (Unlike university, most high schools must wear a uniform.)を加えた 4 つの文について、誤った文だと判断した被験者の説明・訂正課題の平均スコアをグループ別にまとめたのが次の表 3 である。先に説明したように、説明・訂正課題は 0 点から 2 点で点数化した。Aグループの被験者は主題陳述型誤文を 93.5%から 100%の正解率で判断した上、その説明についてもほとんどが主語の問題であると正しく説明あるいは訂正していることがわかる。Bグループの被験者の場合、説明・訂正課題の平均スコアが 1.7~1.8 程度になっている。これは誤文と判断しているものの主語の問題と認識していない被験者が Aグループよりも多く含まれていることを示している。Cグループの場合は Q20 を除いて説明・訂正課題の平均スコアが 1.0 を下回っており、これは誤りの理由として主語以外の点を指摘している被験者が半分以上いることを示している。特に Q17 ではこのスコアが 0.16 しかなく、この文を誤りとしている被験者のほとんどが主語の問題に意識を向けていないことがわかる<sup>2</sup>。

## 日本人英語学習者は主語をどうとらえているか 一量的・質的研究

表 3 主題陳述型誤文の正答率と説明・訂正課題の平均スコア

	Q7		Q17		Q9		Q20	
	正答率	説明点 平均	正答率	説明点 平均	正答率	説明点 平均	正答率	説明点 平均
Aグループ	93.5%	1.97	96.7%	1.90	96.8%	1.90	100.0%	1.88
Bグループ	64.6%	1.72	55.4%	1.68	75.4%	1.84	81.5%	1.74
Cグループ	24.6%	0.77	60.0%	0.16	52.5%	0.75	65.6%	1.23

判断の一貫性という点からも、3つのグループには顕著な違いがある。上の4つの文のいずれも誤っていると正しい判断をした被験者の割合は、Aグループで88.7%(55/62)、Bグループで41.5%(27/65)、Cグループで11.5%(7/61)と顕著に差があった。この結果、これら4つの文の信頼度をクロンバックのアルファによって調べたところ、AグループとBグループのグループではそれぞれ $\alpha = .77$ と $.75$ と高かったが、Cグループの場合は $\alpha = .50$ と低く、Cグループの被験者がこの4つの文について一貫性のある判断を示すことができていないのではないかと強く推測できる。

次に道具格の主語を含む文 Q10 (The hammer broke the window into pieces.)と Q19 (This key can't open the door. It is a wrong key.)を取り上げよう。この2つの文については、Aグループの被験者でも判断が半分に分かれる結果となった。Q19の結果を図5に示した。AグループやBグループでは、時や場所の主語に比べて判断を迷っているという傾向がある一方で、主語が人でなければならぬと説明し、一貫してこれらの文を誤りと判断する被験者も多かった。主題陳述型誤文を正しく誤文と判断できる被験者で、かつ道具格主語の2つの文を誤りと判断した人がAグループでは19名(30.6%)、Bグループでも12名(18.5%)いた。このような被験者の中にはある意味で調査の目的を「見切って」おり、各文の文法性の違いを判断するというよりは、主語と述語を見るだけで機械的に回答していると思われる例もあった。また上の表1に見るように、全体としてQ10の正答率(61.2)がQ19の正答率(45.7%)よりも高かったが、これにはモダリティの影響があるかもしれない。

## Q19. This key can't open the door.

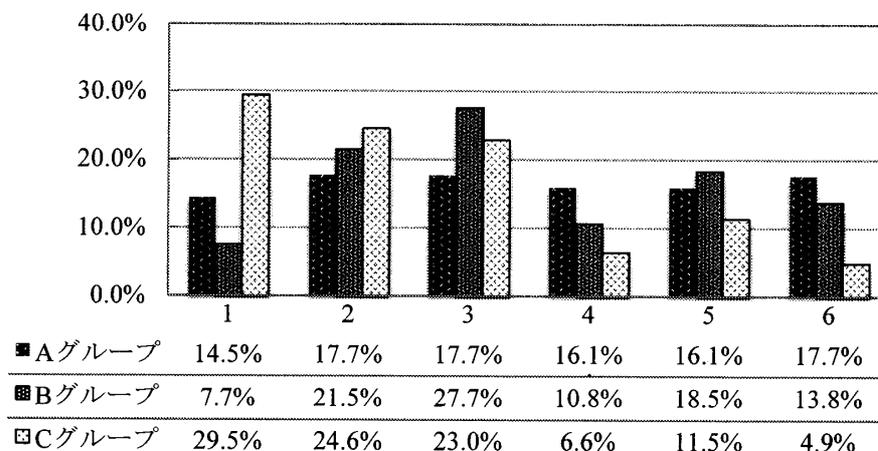


図 5

道具主語の一例とも言える Q1 (There are many things that money can't buy.)については、*money can't buy* を誤りだと判断する被験者が A グループや B グループでは多数派であった。この例で *buy* の主語に動作主ではなく *money* が来るというのは明らかに慣用的な表現であり、このような文を初めて見たときに違和感を感じるのは、ある意味で健全な感覚と言えるだろう (図 6)。

## Q1 There are many things that money can't buy.

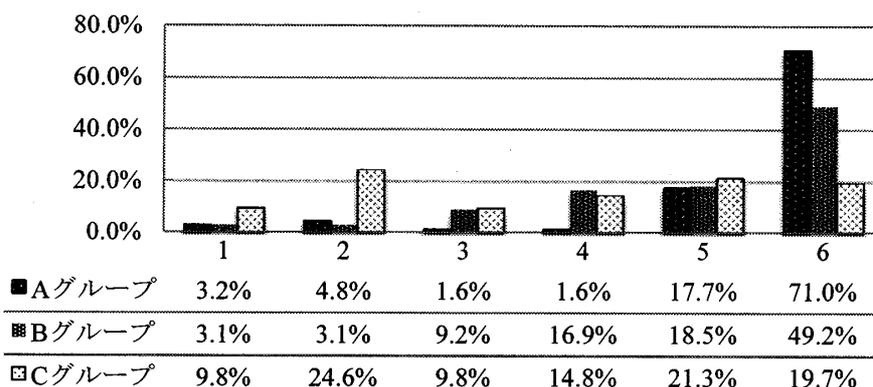


図 6

Q16 (Most newspapers wrote about the train accident yesterday.)の文を誤っていると判断した被験者は A グループと B グループではほぼ同じく 70%あったが、これら 2つのグループでは訂正の仕方に違いが見られた。A グループの場合、*wrote* の代わりに *said* や *told* とすべきだ、という回答が 16 件あった。一方、B グループでは、主語が新聞なので「書かれて

## 日本人英語学習者は主語をどうとらえているか 一量的・質的研究

いた」と受身にすべきだという回答が 65 名中 23 名(35.4%)あったのが特徴的である。基本的な主語述語関係の意識を持つ一方で、「モノを主語にするなら受身」という一般化をしていると思われる学習者が予想以上に多いことがわかった。この文を(5)のように受身の形にした場合、誤って容認する学習者が潜在的にかなりいるのではないかとと思われる。

## (5) Most newspapers were written about the train accident yesterday.

また C グループでも、この文は受身にすべきだと同様の指摘をしている回答が 61 名中 12 名(19.7%)あった。

Q16 で誤った受身の文に修正する被験者が多くいたことには根拠があると考えられる。この文は、上で取り上げた Q7、Q9、Q17 のような総称的な文ではなく、過去の特定の出来事を表している。このため「新聞が記事を書く」という主語の使い方がおかしいと感じたとしても、主語として不特定の *you* や *they* を使うことができない、あるいは使いづらいと感じたのだろう。B グループの被験者が書いた「新聞が記事を書くわけではないと思う。どうなおしたらいいかはいまいちわからない。(B34)」という説明からは、主語の選択に困っている様子が見える。また、この文には目的語がないため、受動分詞のあとに目的語を残すことはできない、と理解している被験者にとっても違和感がないのだと考えられる。このような判断が合わさって、受身に修正することが可能な選択肢と感じられたのではないだろうか<sup>3</sup>。

## 4.3 個別の事例

ここまで取り上げた主題陳述型誤文と道具主語文を中心に、被験者が主として説明・訂正課題にどのように答えているのか、いくつかの具体例をあげ、個々の被験者の持っている文法意識を取り出すことを試みたい。

A11 は、主語述語関係への意識が明確で日本語的な主題陳述型誤文を一貫して排除することができる被験者である。この被験者は誤文に対して、「ホテルが使うわけではないから(Q7)」、「Summer が楽しむわけではないから(Q9)」、「高校が着るわけではないから(Q17)」といった説明を行い、いずれの文も「間違っている(1)」と確信をもった判断をしている。同様に、「ハンマーがこわすわけではないから(Q10)」、「カギがドアをあけるわけではないから(Q19)」、「お金が買うになっているから(Q1)」、「新聞が書くわけではないから(Q16)」、「Last year が見ることになっているから(Q6)」、「レストランの人が必要としているから(Q11)」と説明し、人間を主語としていない文を広く誤文と判断している。ただし、Q16 と Q11 についてはそれぞれ 3、2 と評価し、微妙な確信のなさを表現している。

A08 は、英語の主述関係について意識しているものの主題陳述型の誤文を排除していない被験者である。この被験者に特徴的なのは、「主語が「ホテル」なのがおかしいが、文法的には可(Q7)」、「文法的には可。主語が変(Q17)」とし、これらの文を 5 と評価していることである。また Q9 については評価を 3 とし誤文と判断しているものの、「おかし

いように見えるが、「花火大会では日本の夏がよく味わえる」という文になるのかもしれない」と説明している。また、道具主語の Q10 と Q19 についてはともに「意味は不明だが文法的には可能」として 4 の評価をしている。さらに Q6 (Last year saw some important development in computer technology.) について「この主述関係は存在する。『「時」+ see』」と説明し、「正しい(6)」の評価をしている。主語や目的語がきちんとそろっている場合に文法的と判断し、一見意味がおかしくても実際には可能な文があるのではないかと慎重な姿勢を見せているように思える被験者である。

B89 は人を主語にする意識はあるものの、モノを主語にした場合に受け身化する傾向を持っている被験者である。この被験者は、「People in Japan can enjoy fireworks festivals...(Q9)」、「There are a lot of things that we can't buy. (Q1)」のように人間を主語にした訂正をしている一方で、「This hotel cannot be used the Internet in the room. (Q7)」、「In Nagano can be seen a beautiful view of mountains. (Q20)」、「Most newspapers was written about the train accident yesterday. (Q16)」のような受け身の形を用いた訂正を試みている。主題陳述型誤文の判断に確信がなく、Q1 や Q7 は 3 の評価、Q9 と Q20 は 2 の評価をしている。また、道具主語文である Q10 と Q19 については、それぞれ 5 と 4 の評価をし、受動文への訂正は行っていない。

B47 は主題陳述型誤文を排除できない被験者の典型である。正しい文と判断した理由は求めていないのだが、和訳文を見ることでこの被験者が日本語の影響を受けて英文の意味をとらえていることが推察できる。「このホテルの部屋ではインターネットが使えない(Q7)」、「日本の夏では多くの場所で花火大会を楽しむことができる(Q9)」、「大学と違って、ほとんどの高校では制服が義務付けられている(Q17)」、「長野では美しい山の景色を見ることができる(Q20)」、「昨日の多くの新聞では電車事故についてかかれていた(Q16)」のように、主題部分が「～では」と共通して訳されていることがわかる。この被験者は以上の 5 つの文をいずれも「正しい(6)」と確信をもって評価している。この被験者が誤文と判断した文は全部で 4 つあるが、主語に関する違和感を表現している説明は 1 件もなく、「are→is (Q1)」、「saw→see (Q6)」、「a teacher→teacher (Q8)」、「with がいらぬ(Q15)」といった指摘をしていた。このように語のレベルでの訂正を指摘する傾向は、主語述語関係への意識が希薄な被験者に特徴的であった。

#### 4.4 まとめ

まとめとしてグループ別に特徴を取り上げると、A グループは最も均質で、英語の主語述語関係について明示的かつ一貫性のある判断を示した被験者が大半であった。また、一般化の結果、Q1 のような慣用的な構文をきっぱりと非文法的と判断する被験者が多数いたことも特徴的である。

B グループの場合、動作主性について一貫した判断をしている被験者が約 40 名 (2 分の 1) いた。一方で、日本語の主題陳述型文に対応した訳に違和感を感じず、主題陳述型誤文を不自然と思わない被験者が約 20 名 (4 分の 1)、人主語への意識はあるが一貫していなかったり、ぼんやりしていたりする被験者が約 20 名 (4 分の 1) いた。3 つのグループ

の中では、均質性が最も低く、英語の主語性への意識がある学習者とそうでない学習者が混在しているグループだと言える。

Cグループでは、4つの主題陳述型誤文を一貫して排除し、それに対して主語述語関係の問題だと明示的に意識している被験者は2名しかいなかった。動作主や主語述語関係といった抽象度の高い規則性への意識が低いためか、文を誤っていると判断する場合にも、その根拠として名詞の数や冠詞、前置詞のように具体的な語と結びついた局所的規則を指摘する傾向が強かった。このグループはQ19やQ1の正答率が他のグループに比べて高かったが、違和感のない日本語に訳せるかどうかを文法性判断の主要な基準とする傾向があることをうかがわせる。

## 5. 追加面接

ここまでの全体調査では、被験者が正しい文をなぜ正しいと判断するのかを聞き出すことはできなかった。そこで最も主語意識を欠いているように見えるCグループの被験者4名に追加的な面接を行い、もう少し詳しく文法性判断の根拠を尋ねることにした。追加面接では、動作主を主語にした文と主題を主語にした文の両方を並べて提示し、5段階で正しさの違いを評価するように求めた。回答の際には様子を観察して、どういう順序で回答したか、判断を途中で修正した例はなかったか、といった点を記録した。その後、評価の根拠を口頭で説明してもらった。追加面接で使用した全文については、Appendix 2を参照されたい。

ケーススタディとして一人の被験者(C37)を紹介する。この被験者は小学校入学前から英語教室に通い、英会話を学んだ経験を持っている。また高校では国際コースに属し、現在大学で英語を専攻している。英語を積極的に学習し、英語への興味を継続的に持ってきた学生だと言える。しかし、この被験者は、本調査で主題陳述型誤文(Q7、Q9、Q17、Q20)をすべて正しい文だと誤って判断していた。

追加面接を通してわかったのは、この学習者が動作主を主語にする主語述語型構文も同時に正しいと判断し、しかも場合によってはそのタイプの文の方がよい文だと認識していることである。ただ、複数の類似した例文の判断を求めた後でも、主題陳述型誤文が間違っていると、訂正することはなかった。むしろ、主題陳述型誤文に対して「意味はすっと入ってくる」と評価し、どちらの文も容認可能だとの判断を崩さなかった。このことからこの被験者は、本来義務的な主語選択の規則を随意的なものと判断しているのではないかと疑われる。また、この被験者に、判断のときに頭の中で日本語に訳していますかと尋ねると、そうしているとの返答であった。

また、もう一人の被験者(C70)も、小学校低学年の時に日本人の教師から英語を習い始め、中学校の時には大手の英会話学校、高校の時には学校のクラブ活動を通してネイティブスピーカーの教師と英会話の練習をしていた。この被験者は、追加面接の文をすべて3から5の文法性を持ったものと判断し、文法的に誤っていると指摘した例は一つもなかった。またこの被験者は、あまり日本語に訳さずイメージで意味をつかむようにしていると語り、「状況が自然に浮かべば正しい文」と判断していると述べている。ただし、本人に

よるこの説明には疑問の余地がある。この被験者は 2b の文 (Most high schools in Japan must wear a uniform.) を 5 段階の 5 (良い)、2a の文 (We must wear a uniform in most high schools in Japan.) を 4 と判定したことについて説明を求められたとき、2a の文は「私たち」だけの話に聞こえるが、2b の文の方が「一般的に日本の高校は～」という感じで意味がつかめる、と言っている。さらに、単純過去である 5a の文 (My high school didn't wear a uniform.) についても、学校が主語に来ている方が学校で決まっている感じがする、として 4 と判定し、人を主語にした 5b の文 (We didn't wear a uniform in my high school.) を 3 と判定した。つまりこの被験者は、自分では意識していないものの先頭の名詞句を文の主題ととらえ、文法的な文と非文法的な文の違いを主題の違いとして受け入れていると思われるのである。日本語にはあまり訳さずイメージで意味をつかむとは言うものの、実際には日本語的な主題陳述型構文に影響を受けて英文を解釈していると考えられる。

学習者の中に義務的な構文規則を随意的と判断する傾向が見られることは、梅原 (2007) でも観察されている。そこではある段階の学習者は、*Let's*+原形動詞の構文を理解し、正しいと判断する一方で、*Let's*+*-ing* の形をした文も同時に広く許容し、両者のニュアンスの違いを説明する場合さえある、ということが指摘されている。上の 2 名の被験者が説明する使い分けも、本来存在しない文法の使い分けを独自に設定しているという点でこれと通じるものがあり、非常に興味深い。

## 6. 最後に

以上をまとめると、A グループに多く存在し、日本語に見られる主題陳述型構文を英語で一貫して排除できる学習者は、動作主や有生主語についての意識がはっきりしていることがわかった。一方、特に C グループに多く存在していた学習者は、英語的な主語述語構文への意識を欠いており、日本語的な主題陳述型の誤文を違和感なく受け入れていることがわかった。これらの学習者は、日本語への翻訳や日本語的な構文に基づく意味解釈に依存している傾向があり、主語述語関係のような一般的な規則よりも名詞の数や冠詞、前置詞といった具体的な語と結びついた規則への意識が高い。また義務的な規則を随意的なものにとらえている可能性がある。

最後に、教育の視点から言えることを付け加えておきたい。一般に初級段階の学習者は形よりも意味に意識を向けるとされている。しかし学習者が意識する意味とは、概念としての意味だけでなく、単に L1 への翻訳を通して理解される意味の場合もある。意味に対する意識を高めるためには、特に初級段階で、動作主性といった抽象度の高い意味役割に注目させたり、人を動作主主語にとる文だけを十分に身につけるよう練習させたりすることで、L1 への翻訳に無意識に依存しないようにすることが大切だと言えるだろう。英語学習の中で主語述語型構文のインプットに触れることはあっても主題陳述型構文に触れることはないのだから、ある種の学習者にとって、肯定証拠だけでは L1 の文法的特徴の転移を排除できないのではないかと、と言わざるを得ない。日本語と英語の違いを意識させるような明示的指導を通して否定証拠を与えることも時には必要だと思われる。今後、このような指導が文法意識に与える効果について、さらに検証していくことが求められる。

## 注

\*本稿は 2012 年度 JACET 関西支部秋期大会 (11 月 24 日、京都産業大学) で行った同名の口頭発表を加筆修正したものである。また、本稿の修正にあたって JACET 関西支部の 2 名の査読者から有益なコメントをいただいた。ここに謝意を表したい。

1 括弧内のアルファベットと数字からなる記号は整理番号。以下同じ。

2 Q17 でこのように誤った指摘が多い理由は *unlike* の意味をつかめていない被験者が多数いたためと考えられる。7 人が *unlike* に問題があると指摘したほか、「接続詞がない」という指摘が 3 件あった。これは *unlike university* の部分を「大学が好きではない」という意味の節と解釈していたためと考えられる。

3 査読者の一人から、Q16 を受け身にする根拠として、「昨日の列車事故に関して新聞(記事)が書かれた」と言えるからではないか、との指摘を受けた。確かに「記事」という意味で「新聞」を使っていると思われる次のような記述がある。

i) 「新聞は書かれている、のほうが正しい」(B18)

ii) 「新聞は「書かれる」ものであるので *wrote* はおかしい」(B26)

しかし、もとの問題文 *Most newspapers wrote ...* を「ほとんどの新聞が書いた」と理解するのであれば、「新聞」を「記事」ではなく「媒体」の意味で解釈することが自然であろうし、これを受け身に訂正する場合にも *newspapers* 自体の解釈を変更することは不自然だと考える。

実際、次のような例は「新聞」を「記事」の意味でとらえているとは考えられない。

iii) 「「新聞が書いた」のではなく「新聞に書かれた」。Most newspapers was wrote about ~が良いと思う」(B59)

iv) 「新聞が書いたのではなく、新聞に書かれていたの方がよいと思う」(B82)

また、

v) 「Most newspapers was written と受身に」(B38)

のように、*most* を明示している場合も、*newspapers* を「記事」の意味と解釈することはできないだろう。

## REFERENCES

柴谷方良 (1985) 「主語プロトタイプ論」『日本語学』4-10, 4-16.

梅原大輔 (2007) 「Let's 構文への文法意識とその習得」『甲南女子大学研究紀要—文学・文化編』43, 21-28.

Comrie, B. (1989) *Language universals and linguistic typology*. Blackwell.

Ellis, R. & Barkhuizen, G. (2005) *Analysing learner language*. Oxford University Press.

Fuller, J. W. & Gundel, J. K. (1987) Topic-prominence in Interlanguage. *Language Learning*, 37, 1-18.

Jin, H. (1994) Topic-prominence and subject-prominence in L2 acquisition: Evidence of English-to-Chinese typology transfer. *Language Learning*, 44, 101-122.

Jung, E. (2004) Topic and subject Prominence in Interlanguage development. *Language Learning*,

梅原 大輔 / 富永 英夫

54, 713-738.

Li, C. N. & Thompson, S. A. (1976) Subject and topic: a new typology of language. In C.N. Li (ed.) *Subject and topic*. New York: Academic Press.

Rutherford, W. (1987) *Second language grammar: Learning and teaching*. Longman.

Sasaki, M. (1990) Topic prominence in Japanese EFL students' existential constructions. *Language Learning*, 40, 369-385.

**Appendix 1:** 本調査で使用した文

1. There are a lot of things that money can't buy.
2. This train doesn't need an express ticket. It is a rapid service.  
快速
3. This stadium can sit more than 50,000 people.
4. This is a nice café and its coffee is very good taste.
5. This river can be drunk water because it is very clean.
6. Last year saw some important development in computer technology.
7. This hotel cannot use the Internet in the room.
8. My father's job is a teacher. He is proud of teaching.
9. Summer in Japan can enjoy fireworks festivals in many places.  
花火大会
10. The hammer broke the window into pieces.
11. This restaurant always needs a reservation, because it is very popular.
12. You can enter the public swimming pool with a small admission fee.  
入場料
13. I have a 10-year-old younger brother. His character is very shy.
14. This blue jacket looks good on you.
15. It feels nice to be with my good friends.
16. Most newspapers wrote about the train accident yesterday.
17. Unlike university, most high schools must wear a uniform.
18. Everybody in the class is expected to give a short speech.
19. This key can't open the door. It is a wrong key.
20. In Nagano can see a beautiful view of mountains.

**Appendix 2:** 追加面接で使用した文

悪い(1)から良い(5)までの五段階で次の各文を評価してください。

- ( )1a. This hotel cannot use the Internet in the rooms.
- ( )1b. You cannot use the Internet in the rooms of this hotel.
  
- ( )2a. We must wear a uniform in most high schools in Japan.
- ( )2b. Most high schools in Japan must wear a uniform.
  
- ( )3a. Summer in Japan can enjoy fireworks festivals in many places.
- ( )3b. You can enjoy fireworks festivals in many places in summer in Japan.
  
- ( )4a. We can see beautiful view of mountains in Nagano.
- ( )4b. In Nagano can see a beautiful view of mountains.
- ( )4c. Nagano can be seen a beautiful view of mountains.
  
- ( )5a. My high school didn't wear a uniform.
- ( )5b. We didn't wear a uniform in my high school.
  
- ( )6a. Most newspapers wrote about the train accident yesterday.
- ( )6b. Most newspapers were written about the train accident yesterday.
  
- ( )7. Last year saw some important development in computer technology.
  
- ( )8. Water of this river can't drink.
  
- ( )9. This restaurant must be reserved a table on Saturdays and Sundays.